



常設公演の開演前に撮影を終えて康楽館の外に出たあと、修学旅行生たちの歓声が外まで漏れてきて、ここが現役の芝居小屋であることを実感させられた（撮影協力／札幌市立屯田北中学校修学旅行団）

現存する日本最古の芝居小屋として知られている小坂町の康楽館が落成し大阪歌舞伎の一座を招いてこけら落としを行ったのは、明治43年（1910）8月16日のことであった。それから今年でちょうど百年目の夏となる。

「日本最古というのもあることながら、日本唯一の和洋折衷造りというのがこの小屋の魅力だと思っんですよ」と、平成3年から6年間ほど康楽館館長を務めた中村脩太郎さん（63）は語る。

康楽館は、明治後期に鉱産額日本一の空前の活況を呈していた小坂鉱山の厚生施設として誕生した。人口が2万人前後までふくれあげ、秋田市に次ぐ県下2番目の都市になっていた小坂町の、「娯楽の殿堂」であったわけだ。

しかしやがて鉱山景気は下火になり、テレビの普及などもあって、康楽館は昭和50年代には一度その役目を終えることになった。

しばらくのあいだ廃墟同然の状態が続いた

のち、俳優の小沢昭一さんなどからぜひとも保存活用すべきとの声が高まり、鉱山会社から町が無償譲渡を受けて、昭和61年より新生・康楽館として再スタートを切ったのである。

それから数えて二代目の館長になる中村さんは、康楽館の観光資源としての成否が未知数の中、修学旅行の獲得に賭けることにした。北海道を中心に、みずから東奔西走の日々。ご苦労も多かったのではないかと思うのだが、手応えがあったいへん充実した日々であったと、ご本人は回想する。

ハコ（建物）は、お金をかければ保存することはたやすい。しかし、それを生かし、再び命を吹き込むには、人の知恵と汗が欠かせないのだ。

鉱山会社や町のお荷物になりかねなかった古い芝居小屋が、今では逆に地域の「希望の星」のような存在である。康楽館は、今日も元

## 百年目のハイカラ劇場